第６章

トンガにおける生産様式と階級関係の歴史的変化

大 谷　裕 文

はじめに

ポリネシアの諸社会は，基本的に上下の格付け原理に基づく顕著なヒエラルヒー秩序を有していたので，ヒエラルヒー現象は，古くからこの地域の社会・文化に関心を有する人類学者・民族誌家の記述・説明の焦点となってきた。トンガ諸島もその例外ではない。1920年代の初めにトンガでフィールドワークを行ったギフォードは，彼の民族誌（Gifford［1929］）の中で，「ランクには広範な段階的変化が認められるが，トンガ人は三つの一般的な階級（クラス）――すなわち首長（houeiki），首長の従者（matapule）および平民（tua）――を認めている」と述べている。この記述から明らかなように，ギフォードは，かつてランクという語で指示されていた土着の格付けカテゴリーを階級と呼んでいるのであるが，階級という語を使用せねばならない必然的な根拠については何も述べていない。この他に，ギフォードは階層（stratum）という語も使用しているが，階層と階級の違いは全く不明確である。

その後1950年代になると，社会的成層（social stratification）という概念が，トンガを含むポリネシアのヒエラルヒー現象の研究において，多くの人類学者によって使われるようになった。その代表は当時新進気鋭の人類学者として活躍し始めていたサーリンズ（M. Sahlins）とゴールドマン（I. Goldman）である。サーリンズは，社会的成層の二つの特質，すなわち成層化の度合

（degree of stratification）と成層の形態（form of stratification）に着目して，14のポリネシア社会のデータを比較検討し，第1群（高成層化社会―トンガ，ハワイ，タヒチ，サモア），第2群（中成層化社会―a群：マルケサス，ティコピア，フツナ，b群：マンガレバ，マンガイア，イースター，ウベア），第3群（低成層化社会―プカプカ，オントンジャワ，トケラウ）からなる社会的成層の3類型を示している（Sahlins［1958: 11-12］）。当時のサーリンズの関心は，経済的基礎に基づいて特殊進化の過程を説明することに向けられていたので，上述した社会成層の3類型は，各島嶼社会の生態学的条件とそれに起因する生産力の差異によって引き起こされた特殊進化の動態的過程の結果として解釈されている。一方，ゴールドマンは，ポリネシア社会に内在的な「地位競争（status-rivalry）への関心」という価値志向性に焦点を絞りながら，地位システムの変異を比較検討し，⑴成層社会（stratified society）―トンガ，ハワイ，タヒチ，マンガレバ，⑵開放社会（open society）―ニウエ，イースター，マンガイア，マルケサス，⑶伝統社会（traditional society）―サモア，オントンジャワ，ティコピア，プカプカ，トケラウ，マニヒキ，ラカハンガ，マオリ，トンガレバ，フツナ，ウベアの3類型を設定している（Goldman［1955: 680-682］）。社会成層化の起動力を生態学的条件に規定された生産力に求めるサーリンズとその起動力を表象レベルの価値（地位競争志向）に求めるゴールドマンの方法には大きな隔たりがあるように見えるが，このような隔たりは見せかけのものにすぎず，両者は大きな問題点を共有していた。それは社会的成層の概念それ自体が内包する問題である。

アメリカの人類学者が使用する社会的成層の概念は，社会学者のそれと同様に，個人や集団の垂直的に分化した状態を意味しており，通常，階層（stratum）の上位概念として使われる。また，アメリカの人類学者の多くは階級概念の有効性に懐疑的であるが，階級（class）という語を使用する場合でも，それを成層と同一視していることが多い。フィールドワークにおける社会的成層の実証的な把握に際しては，当該社会に存在するフォーク・カテゴリー，住民相互の主観的（相互主観的）な価値評価，職業，収入，学歴，

親族関係，財産，生活様式など，任意の指標が手がかりとして利用される。このような意味で，社会的成層は，現実に存在する社会的な実体ではなく，当該社会の人々を操作的に優劣関係の中に位置づけることによって得られた任意的カテゴリーであると言えよう。社会的成層の概念は，当該社会における地位の全体的な布置状況や社会移動のパターンを説明するうえで，今日でも一定の有効性をもっているが，指標の操作の仕方によっては無限に多様な成層が創り出されてしまうこと，各成層間の関係が生態的・連続的・整合的に捉えられやすいこと，したがって歴史の動態を説明する概念としてそれを使うことはできないこと等々，多くの難点を抱えている。

1960年代および1970年代になると，タヒチの農民のペザント化とプロレタリアート化を論じたフィニー（B. Finney），民族集団を超えてフィジー社会にインパクトを及ぼした経済諸力の分析を行ったメイヤー（A. Mayer）のように，オセアニア研究の領域においても，社会的成層研究の限界を超えて歴史の動態を説明しようとする試みが，少数ではあるが現れるようになった。1980年代に入ると，ポストコロニアル運動と連動して，オセアニアの階級に関するネオマルクス主義的な研究が徐々に増加していき，1990年代には，このような動向がさらに顕著になっていく。そのなかで特に注目に値するのは，ニュージーランドの人類学者レッキー（J. Leckie）の研究である。

レッキーは，ゴドリエ（Maurice Godlier），メイヤース（Claude Meillassoux）などフランスのネオマルクス主義的人類学者の生産様式論（とりわけアジア的生産様式論）を再検討して，オセアニア地域の前資本主義的生産様式（pre-capitalist modes of production）として，⑴共同的生産様式（communal mode of production）ないしはリネージ的生産様式（lineage mode of production）と⑵貢納的生産様式（tributary mode of production）が重要であり，⑴はメラネシアの伝統的諸社会に，そして⑵はポリネシアの伝統的諸社会に妥当するという見解を示している（Leckie［1990: xvii-xxv］）。この見解は，トンガの前資本主義的生産様式の研究にとっても極めて示唆的であるが，筆者としては，レッキーの見解を若干修正して，プレ・コンタクト期のトンガにおける生産様式

が，共同的生産様式を超えるものではなく，トンガにおける貢納的生産様式は，西洋文化との持続的接触を経験し始めた18世紀末から資本主義の世界システムのなかに組み込まれた19世紀末に到る約100年の間に，徐々に形成されていったことを論証したいと考えている。

レッキーの見解のなかでもう一つ注目すべき論点は，太平洋島嶼社会への植民地主義・資本主義の浸透を，生産様式の節合（すなわち前資本主義的生産様式と資本主義的生産様式の節合〈articulation of the capitalist modes of production with pre-capitalist modes of production〉）ならびに「労働者階級概念の再構成」という観点から捉える必要があることを強調していることである。こういったレッキーの観点は，植民地化を経験した小規模な太平洋島嶼社会に西欧経済先進国で練り上げられていった階級分析モデルを適用することが可能であるか否かという根本的な問いと結びついている。「太平洋島嶼社会に階級モデルを適用することはできない」あるいは「太平洋島嶼社会の階級分析は無意味である」と主張する研究者は，今日においても決して少なくはない。というのも，太平洋の島々は，前資本主義的生産様式から資本主義的生産様式への直線的な移行とそれに伴う労働者階級の出現という「伝統的」なモデルから最も遠く離れた社会であるからである。このような見方に対して，レッキーは異を唱える。太平洋島嶼社会への資本主義の浸透は，首長の権力によって媒介された生産様式の節合に帰着することが多かったので，恒常的かつ顕在的な労働者階級が形成されることはなかった。しかし，生産様式の節合の進展とともに，太平洋島嶼社会に生きる人々の大多数は，「ペザント」として賃労働に依存する生活を余儀なくされるようになっていった。「ペザント」は，一定面積の農地という生産手段を所有し，タロイモ，ヤムイモ，キャッサバなどの「自給用作物」の栽培を行いながら，見かけのうえでは，豊かな生存経済ベースでのんびりと幸せに生きているように見えたが，現実には何らかの形で不定期の賃労働を行わなければ，生活必需品を購入できないだけではなく，税の支払い，村会や教会への献金，学費の納入，その他の社会的義務の履行を行うこともできなかった。首長・資本家は，植民地状況のもと

で，通常は生存経済ベースで生きている「ペザント」という豊富な「予備労働力」を必要なときに都合よく搾取し，支配の強化を図っていったのである。このような視点から，レッキーは，太平洋島嶼社会では，「ペザント」を核とする全ての肉体労働者（ここには，村落民・都市民，男性・女性，若者・年長者，有給労働者・無給労働者など，肉体労働を行う全ての者が含まれる）を労働者階級として捉える「改釈」を提示している（Leckie［1990: 254］）。

以上のようなレッキーの労働者階級の「改釈」は，伝統的な階級概念からはかなりかけ離れてはいるが，太平洋島嶼社会の政治経済的現実を把握するうえで有効性を有していると思われるので，筆者としてもこの「改釈」を継承することにしたい。

しかしながら，レッキーの見解のなかには受け入れることのできない部分もある。それは，レッキーが，「改釈」されているとはいえ，基本的には太平洋島嶼社会の階級関係を資本家階級と労働者階級というマルクス以来の二大階級論の構図で捉えている点である。確かに，この二大階級は，今なお太平洋島嶼社会の階級関係の基軸をなしているが，近年，太平洋島嶼社会では，「中間階級」の台頭という新たな現象が顕著になってきている。こういった「中間階級」の台頭を「改釈」された二大階級論のみで把握することは困難であろう。そこで「中間階級」の動向を把握するために，別の概念装置の導入が必要となる。このような概念装置として，イギリスの社会学者ギデンス（A. Giddens）が展開した階級モデルは特に注目に値するものであると言えよう。

ギデンスは，「中間階級」の問題を考えるうえで重要な社会科学者は，今でもなお，マルクスとウェーバーであると考えている。しかし，マルクスは，生産手段の所有という要因から直接的に派生しない「市場能力の差異」が生み出す重要性に注意を払うことがなかったので，資本主義における「中間階級」は，「適切に分析されることが一度もなかった集群」である（ギデンス［1977: 98-99］）。一方，ウェーバーは，この問題に接近する手がかりを示したが，「非常に多様でありうる異なった階級的地位を，社会構造と社会変動過程の主要な構成要素を説明するために十分操作しうる数の階級にまで，どのように減

少することができるかという問題」を明らかにしていない（ギデンス［1977: 99］）。そこで，ギデンスにとっての重要な課題は，マルクスとウェーバーの両者にとって基礎的である前提，すなわち「市場は本来的に一つの権力構造であり，そこにおいては，ある諸属性を所有することにより，諸個人よりなるある集群が他の集群よりも有利な立場におかれる」という前提から出発することである。このような前提から，資本主義社会における階級関係の構造化を解明するためのキー概念は，三種類の市場能力（market capacity）――生産手段の私的所有，教育上および技術上の資格の所有，肉体労働力の所有――であり，この三種類の市場能力が，個人移動および世代間移動の封鎖形態と結びつくとき，上層階級，中間階級，労働者階級という資本主義社会における三階級組織が形成されるという結論が導き出される。以上のギデンスの階級論は，ヨーロッパ社会の階級関係の分析に基づいているので，そのままオセアニアの島嶼社会に適用することはできないが，市場能力，とりわけ教育・技術上の資格所有の重要性は，徐々に市場の支配力が増大してきているオセアニア諸社会の研究においても，考慮に値する視点であると言えよう。

本章は，以上に述べたような視点から，トンガの人々と西洋人との持続的な接触が始まる以前のプレ・コンタクト期において支配的であったと考えられる共同的生産様式とそれに基づく身分構造，トンガが西洋文化との持続的接触を経験し始めた18世紀末からグローバルな資本主義システムのなかに組み込まれていった19世紀末に到る約100年の間に徐々に形成されていった階級関係と貢納的生産様式，19世紀末以降に進行していった貢納的生産様式と資本主義的生産様式の節合と「ペザント」を核とする労働者階級の形成，1970年代に顕著になっていった「中間階級」の台頭の諸過程を実証的に明らかにしていくことをその目的としている。

第１節　プレ・コンタクト期の身分構造と生産様式

トンガの人々が，最初に西洋人と接触したのは1616年であるが[1]，西洋人との持続的な接触を経験するようになったのは，18世紀末から19世紀初頭にかけての時期である。ここでいうプレ・コンタクト期は，西洋人との持続的な接触が始まり，トンガ社会が西洋文化の大きな影響を被り始める19世紀初頭以前の時代を指している。プレ・コンタクト期のトンガは，他のオセアニアの諸社会と同じく，史の記録をもたない無文字社会であった。しかし無文字社会のなかにも，闘争，競争，流動性，不安定性などによって特徴づけられる歴史の動態とそれを生成する顕著な政治・経済的不平等構造が見られる社会が少なからず存在している。トンガも，このような無文字社会の一つであった。

プレ・コンタクト期のトンガの状況を伝える西洋人（探検家，宣教師，ビーチコーマーなど）の記録は幾つか残っており，それらは何れもこの時代のトンガを知るための貴重な史料である。しかし，それらの記述内容は断片的であり，プレ・コンタクト期のトンガの歴史を再構成するためには不充分なものである。このような史料の不足を補う土着の素材として，口頭伝承の重要性が高まってくる。実際にプレ・コンタクト期のトンガにおいては，口頭伝承は過去の出来事と人々の営みを伝えるほとんど唯一の媒体であった。しかし，伝承は基本的にイデオロギー作用を通して構成された象徴的な言説であるので，過去の出来事を忠実に指示しているとは限らない。サーリンズの言葉を借りれば，伝承は，「史実ではないとしても，なおそれは歴史の真実（詩的論理）」という属性を有している（Sahlins［1981: 10］）。しかも，王権の簒奪，外来王による征服，政治統合形態の変化，あるいはヨーロッパ人との接触といった危機的状況のなかで，伝承内容やその解釈の再構成が頻繁に起こる。このような意味で，口頭伝承を不用意に絶対年代の確定や史実再構成の史料として使う立場には問題が多い。しかし，利害の対立する複数の親族集団の

伝承内容に一致が認められる場合，あるいは他島への侵略・征服の伝承と当該社会の伝承が一致したり，ある王の事績を語る伝承と現在残っている石造建築物などの遺物との対応が確認される場合は，伝承の内容を出来事として認めることも許容されるであろう。本節では以上の点を考慮しながら，プレ・コンタクト期の歴史再構成の典拠として，西洋人によって記述された文献史料に加えて，様々な口頭伝承――筆者が収集したものを含めて――を利用していくことにしたい。

1．プレ・コンタクト期の身分構造

プレ・コンタクト期のトンガにおいても，身分の分類・格付けカテゴリーはかなり明確であった。1806年～1810年の4年間トンガに滞在したイギリス人マリナー（William Mariner）は，充分なトンガ語の力を駆使して，当時のトンガにトゥイ・トンガ（Tooitonga: 現代表記ではTui Tonga），ハウ（HOW: 現代表記ではhau），エイキ（EGI: 現代表記では‘eiki），マタプレ（MATABOOLE: 現代表記ではmatapule），ムア（MOOA: 現代表記ではmua），民衆（TOOA: 現代表記ではtu‘a），ポプラ（Boboola: 現代表記ではpopula）からなる分類・格付けカテゴリーのヒエラルヒーが存在することを理解していた（Mariner［1827, vol.2: 84-86］）。マリナーが記述している，以上のような格付けカテゴリーの序列に沿って，次に各カテゴリーの意味内容を述べていくことにしたい。

トゥイ（Tui）は，トゥイ・トンガとその家族を意味する言葉である。トゥイ・トンガの始祖は，天空神タガロアの子として天界から地上へ降下してきた半神半人のアホ・エイツと考えられていた。トゥイ・トンガは，この世界の秩序の中心であり，季節の順調な推移と大地の豊穣性の守護者として神話的に表象されていた。強力な霊力で満たされたトゥイ・トンガの身体は，この世の秩序と同一視されており，食事，移動，他者との相互作用も種々のタブーによって印づけられていた。このようなトゥイ・トンガの特殊な存在性格は，インセスト，特異な発話のスタイル，割礼や文身の禁止といった共同

体の規範を超越する種々の行為によって印されていた。トゥイ・トンガの霊力には転移性があり，この点についてフレーザーは次のように述べている（フレーザー［1972, vol.2: 117-118］）。

> トンガでは，神聖な酋長の身柄や，彼の所有となっているものに触れた手で食事をすると，全身が腫れあがって死亡すると信じられている。酋長の神聖性が猛毒のように家臣の手を侵し，更に手から食物に転移して，食べた当人に致命的な結果となって現れるのである。

プレ・コンタクト期のトンガにおけるタプの観念は，以上のような「致命的な結果」を未然に防ぐ危険信号として，トゥイ・トンガの不可侵性のみならず，分類・格付けカテゴリー一般の混乱を防御し，それを「正常」な状態に保つうえで重要な意味をもっていたと考えられる。トゥイ・トンガの実践上の主たる役割は，世界の秩序を更新するための儀礼の遂行であり，特に毎年2回行われていたイナシは，最も盛大かつ重要な儀礼であった。イナシは，豊穣の女神ヒクリオへの収穫物の供犠であり，理念的には全ての首長の参加と進貢が義務づけられていた全島的な儀礼（再分配儀礼）であった。このような意味で，トゥイ・トンガは創世神話と結びついた儀礼的な最高首長（これまで，しばしば神なる王と呼ばれてきた存在）と呼ぶことができるであろう。

ハウ（Hau）は，トゥイ・トンガと並立していた世俗的な最高首長トゥイ・カノクポルとその家族を意味している[(2)]。トゥイ・カノクポルの基本的な属性は，政治的リーダーであり，軍事と行政上の任務に責任を負っていた。パレス・オフィスの伝承によれば，トゥイ・カノクポル王朝は，系譜的には，トゥイ・トンガのハア（ha‘a: 出自集団）[(3)]に由来するものであった。その意味において，トゥイ・カノクポルは，トゥイ・トンガのシノ（貴種性）を継承する非日常的存在と考えられてはいたが，トゥイ・トンガのような半神半人的存在とはみなされていなかったようである。トゥイ・カノクポルは，軍事・行政上の諸問題に関しては，祭司（カウ・タウラ）の託宣を重視しながら，トゥイ・トンガから相対的に自由に意思決定をしていたと言えるが，儀礼，系譜上の格付け，親族原理に基づいた個人的地位，通婚関係においてトゥイ・ト

ンガへの従属が顕著であった。

トゥイ・トンガとトゥイ・カノクポルのもとに，多くのエイキ（‘eiki）と呼ばれる首長が群雄割拠し，これらのエイキのなかにはトゥイ・カノクポルを脅かすほどの政治的・軍事的実権を有する者もいた。エイキ（’eiki）のカテゴリーは，ヒンゴア・ファカノフォ（hingoa fakanofo: ヒエラルヒーと結びついた称号），トト（toto: 血），イヴィ（ivi: 実効的な政治・軍事力）の三つの重要な分類・格付け原理に基づいて細かく下位分類されていたと考えられる（Marcus［1980: 19］）。歴史の動態のなかで，原則として父系のラインを通して相続されたヒンゴア・ファカノフォは，かなり安定していたが，トトとイヴィは，比較的短期間のうちに変動したようである。トトは個人の地位を決定する重要な原理であり，父と母の双方から受け継がれるが，個人の地位の格付けに関しては母のトトの方がはるかに重要であった。また，兄弟と姉妹の格付けに関しては，姉妹の方が常に兄弟より優越していた。以上の三つの原理は，相互に異なる範疇を成しており，それらがすべて重なり合うことは極めて稀であった。そこでこの三つの原理に基づいて，高貴なトトを有してはいるがヒンゴア・ファカノフォとイヴィを欠いている首長，ヒンゴア・ファカノフォは有しているがトトとイヴィを欠いている首長，あるいはヒンゴア・ファカノフォ，トト，イヴィの全てを兼ね備えている首長等々，多種多様な首長が存在していたのである。

マタプレ（matapule）のカテゴリーは，基本的に外来性の表象と結びついている。実際に，マタプレのなかにはフィジー，サモア，ロトゥマなどの島々からトンガにやってきた人々が含まれていたようである。マタプレは，トゥイ・トンガ，トゥイ・カノクポルおよびその他の諸首長の身辺世話係，カバ儀礼の進行係，系譜の語り部，賓客の接待者，首長の決定の代弁者，他の首長との交渉係といった重要な〈媒介者〉の役割を与えられていた。

このほかに，マタプレのなかには，漁撈，航海，カヌー建造，首長の葬儀，大きな家屋の建築，刺青などの専門家として，分業システムのなかで特別な仕事に従事する者もいた（Mariner［1827, vol.2: 87-88］）。また，外来性の表象

と結びついていたマタプレはタブーを免れていたために，トゥイ・トンガの食物に直接手を触れることも認められていた。このように，マタプレは，外来的属性の故に特殊な中間的カテゴリーのなかに差異的に組み入れられ，文化的な統制を受けながらトンガの政治組織のなかで不可欠の媒介的役割を果たしてきたと言えるであろう。

ムア（mua）は，マタプレの下に位置する格付けカテゴリーであり，「マタプレの息子ないしは兄弟，あるいはその末裔」であった（Mariner［1827, vol.2: 87］）。ムアの役割は，公的な儀礼における補佐的な仕事（食物やカバの分配など）を行うことであった。このようにムアも，マタプレの指導のもとで，媒介者として振舞っていたと言えよう。マタプレが他界したとき，ムアがその跡目を相続してマタプレとなり，そのムアの跡目を血縁的に近いトゥアが相続して新たにムアとなっていた（Mariner［1827, vol.2: 87］）。この点から判断するならば，プレ・コンタクト期においても社会的上昇移動の機会がトゥアに対して全く閉ざされていたわけではない。しかし，トゥアからムアへの上昇移動は，ムアとの血縁関係の近接性を有し，跡目相続者に推挙されるという幸運に恵まれた，ごく少数の者だけに限定されていたと考えられる。

こういった中間層としてのマタプレとムアの下に，すなわちプレ・コンタクト期の分類・格付けカテゴリー体系の底辺に，トゥア（tu‘a）あるいはカイ・フォヌア（ky fonnooa: 直訳すれば「土を喰う人」）と呼ばれる圧倒的大多数の民衆が位置づけられ，上位者の統制を受けながら，プレ・コンタクト期のトンガの社会構成体を支える生産活動に従事していた。そして，プレ・コンタクト期の分類・格付けカテゴリー体系の最底辺にポプラと呼ばれていた人々が位置づけられていた（Wood［1972: 3］）。プレ・コンタクト期のポプラについてはあまり明らかではないが，マリナーは，ポプラに「捕虜ないしは奴隷」という訳語を当てている（Mariner［1827, vol.2: 208］）。現代のトンガでは，罪を犯した「囚人」という意味でポプラという言葉が使われることが多いが，プレ・コンタクト期のポプラは，今日的用法とは少し異なり，戦争で捕虜となって，トゥアよりもさらに大きな身分的拘束を受けるようになった人々を

意味していたと思われる。ポプラは，現実の社会的集群としては極めて小さな存在であったと考えられるが，ヒエラルヒーという観点から見るならば，決して無視できないカテゴリーである。というのは，たとえ無視できるほど小さな集群であったとしても，トゥアの下に最底辺のカテゴリーを置くというイデオロギーの作用をそこに見て取ることができるからである。

以上に述べたようなポプラからトゥイ・トンガに至るプレ・コンタクト期の分類・格付けカテゴリー（民俗カテゴリー）を身分構造という観点から分析的に捉えなおすならば，トゥイ・トンガおよびトゥイ・カノクポルからなる最高首長層，その他の様々なエイキからなる首長層，マタプレとムアからなる中間層，そして当時の住民の大多数を占めたトゥアからなる民衆層，民衆層の下に置かれた捕虜・奴隷層（ポプラ）の5層を措定することができよう。このような5層からなる身分構造が存在したプレ・コンタクト期のトンガは，ハワイやタヒチと並んで，オセアニアのなかでも垂直的分化が最も進行した社会の一つであったと言えよう。

2．プレ・コンタクト期の土地占有様式

プレ・コンタクト期のトンガの社会構成体の基礎には，土地用益権を有する親族集団が存在し，この親族集団が営む農業生産が生産活動の基軸となっていた。したがって，この点を中心に，プレ・コンタクト期の生産様式を見ていくことにしたい。

プレ・コンタクト期の土地所有に関して，ウィリアムソンは，「トンガタプ島における唯一の土地所有者は，トゥイ・トンガであり，諸首長はトゥイ・トンガのもとで土地を所有していた」と述べている（Williamson［1924: 266］）。このような土地所有に関する表象は，トゥイ・トンガの力が著しく低下した18世紀末においても，イデオロギー的な理念としては存続していたと言えよう。しかしながら，ウィルソンがダフ号の船長として最初のキリスト教宣教師を乗せてトンガにやってきた1797年には，トンガタプ島は，現実には3人

の有力首長が支配する三つの地区（トゥイ・カノクポルが支配する西方のヒヒフォ地区，ファタフェヒが支配する中央のムア地区，ヴァハーロが支配する東方のハハケ地区）に分割され，この 3 人の有力首長は，それぞれ自分が占有する領地の中で下位の小首長（inferior chiefs）に土地を分け与えていたという（Gifford［1929: 182］）。これらの小首長は，自分の小領地において，カインガと呼ばれる集団（一族）を率い，その政治的リーダーとして振舞うことが期待されていた。パレス・オフィスで収集した伝承を総合すると，下位首長は，カインガを構成するファヒンガ（共系的な性格を有するキンドレッド）の長（ウルモトゥア）に一定の土地区画の用益権（use-rights）を認め，ウルモトゥアはさらにファヒンガを構成する各アピ（世帯）の成員（トゥア）の土地用益権を認めていたようである。こういった点から，プレ・コンタクト時代の土地所有の実際的な形態は，トゥイ・トンガの全島的な土地所有という理念から独立して進行していった，有力首長による領地の占有と小首長およびキンドレッドによる土地用益権の占有であったと考えられる。プレ・コンタクト期のトンガの集落は，散村的な形態をとっていたと考えられるが，散村形態は以上のような土地の占有様式と整合的であったと言えよう。

プレ・コンタクト期のトンガでは，分業もある程度進展していた。マリナーによれば，タロイモ・ヤムイモなどの耕作者以外に，⑴カヌー大工，⑵鯨歯加工職人，⑶葬儀指揮監督者，⑷石工，⑸網作り職人，⑹漁民，⑺大きな家を建築する大工，⑻刺青職人，⑼棍棒彫刻師，⑽貝刃を使う床屋，⑾料理人などの職業があったようである（Mariner［1827, vol.2: 182］）。これらの職業の大半（⑻〜⑽を除く職業）は，世襲であった。⑴〜⑼は，マタプレかムアの職業であり，⑽と⑾はトゥアに限定された職業であった。このような世襲と結びついた分業の進展は，分化した身分構造を固定化するうえで大きな役割を果たしていたと考えられる。

3．貢物と労働サービス

有力首長は，一般に配下の小首長やマタプレを使ってカインガの成員の生産活動（タロイモ，ヤムイモの栽培や漁撈など）を厳しく監視していた。小首長は，自ら，あるいはマタプレを通してカインガの成員に生産労働に関する首長の命令を伝達していた。この命令は，通常，フォノ（fono）と呼ばれる上意下達の集会が開かれ，その場で伝えられていた。生産活動の監視に際して，小首長やマタプレは，上位の首長の権威が生産の現場で尊重されているか否かに注意を払っていた。例えば，ある種のヤシ，豚，魚，バナナは上位の首長のためにのみ提供されるものであったが，これらの生産物を食べているトゥアがいたとき，小首長やマタプレはその事態を上位の首長に報告し，上位の首長が処罰についての判断を下していた。このような処罰は寛大なものであることもあったが，場合によっては，鞭打たれることもあったという（Gifford［1929: 104］）。

こういった厳しい生産活動の監視に加えて，カインガの成員は土地用益権付与の見返りとして，貢物と無償労働サービスを，生産活動に直接携わらない首長層に提供し，この層を経済的に支える負担を担わなければならなかった。青柳によれば，プレ・コンタクト期のトンガにおける貢物と無償労働サービスの実態は次のようなものであったという（青柳［1991: 35-36］）。

(1) 貢物は一般に，ヤムイモ，ござ，樹皮布，干し魚，生きたままの鳥などであって，各人にその土地の使用分に応じて課せられる。貢物のおおよその量は上から伝達されるが，具体的には，各個人の裁量に任されている。

(2) 首長はその品物が十分でないと判定した場合には，その土地の耕作権を没収することが可能である。

(3) そうした報復を恐れて，人々はできる限り首長の気に入られるようたくさんの貢物をすることを心がけた。

(4)　貢物の時期は1年に2回あり，その一つはイナシのときであった[(4)]。

(5)　イナシ以外の貢物は，特定の食物の収穫時に高位の首長の1人によって決定されるもので，イナシほど公的なものではないが，やはりこれを怠ることは反抗とみなされる。

(6)　貢物にはもう一種ある。これは敬意の贈り物ともいうべきもので，豚やヤム芋が用いられる。これはさきの貢納と異なって，必ずしも贈らなければならないというわけではないが，上位者のご機嫌をとり結ぶ目的をもっていた。

(7)　このような貢物や贈り物は平民から劣位の首長に，劣位の首長から高位の首長に，また彼らからより上の首長にというように送られていった。最高位の首長はほぼ2週間に1度の割りでこれらを受け取っていた。

(8)　租税の三つ目は労役である。領民はその土地に生活する恩恵を与えられているのであるから，領主の求めに応じて労働のサービスも提供しなくてはならない。ヴューソンは劣位の首長達がトゥイ・カノクポルの要求に応じて，週に2，3回労働者を提供していたことを伝えている。これらは時には一時に500人にも及んでいた。彼らは耕作，植え付け，その他の労働に従事した。有名な巨石建造物である王や王一族の墓ランギや，巨大な門ハアモンガやエシ（頂上が平らな人工的な丘）の建造は，こうした労働力によって支えられてきたに違いない。

以上のような貢物と労働サービスの他に，トゥアは，更なる負担――フヌキと首長の暴力――を強いられていた。フヌキ（hunuki）は，首長がトゥアの生産物（食物や作物など）を首長が恣意的に収取するために目印を付けたり，あるいはそれらにタプをかけてトゥアの使用を禁ずることを意味していた。ギフォードは，このフヌキについて，次のように記述している。

見回りの途中で，監督者がトゥイ・カノクポルに相応しいと思われる立派な調理用バナナ，ブレッドフルーツ，ヤムイモ，サツマイモを見つけたとき，彼は，バナナの木の幹に鋭利な棒を突き刺したり，ブレッドフルーツの木の枝にココナツの葉を結びつけたり，ヤムイモやサツマイモの近くの地面に棒

を立てたりして，それにタプをかけていた（Gifford［1929: 104］）。

首長の暴力をめぐる伝承も，数多く残されている。例えば，タカイというトンガタプ島の首長は，巨大な石材をトゥアに曳かせていたが，怠けていた先頭の男をその場で殺傷したという。また，トゥイ・カノクポルは，巨大なカヌーが完成したとき，トゥアを枕木として進水させることを主張したという。おそらく，こういった伝承の多くは，力の強大さを誇示しようとする首長の願望を反映した自慢話という性格を持っていると考えられるが，民衆層においても首長から受けた虐待へのルサンチマンが今日まで語り継がれているので，なかには一片の事実を含む伝承もあると思われる。何れにしても，プレ・コンタクト期のトンガの民衆が首長による生産物の収取や重い労働サービスの負担に苦しんでいたことは，ほぼ間違いないところであろう。

４．プレ・コンタクト期の身分構造と親族原理

以上に述べてきたように，プレ・コンタクト期のトンガでは既に５層からなる身分構造が存在していた。そして，身分構造の上層に位置する最高首長や大首長の権力は，暴力も含めてかなり強大であり，民衆は，直接生産に関わらない首長層を支えるために，貢物と労働サービスの重い負担に苦しんでいた。さらに，分化した身分構造を固定化する分業もかなり進展していた。

このような点を踏まえて，プレ・コンタクト期のトンガの身分構造を本来の階級関係として捉え，この時期に既に国家が成立していたと主張する人類学者もいる。しかしながら，筆者は次のような理由で，こういった主張に同意しない。

⑴　口頭伝承において，一方では，首長の大きな権限と暴力が強調されるが，他方では，首長位の相続に際して，多数のトゥアを含むカインガの成員の同意が必要であったことが強調される。

⑵　首長の権限の行使には，カインガにおける再分配の義務の遵守など，親族原理によって一定の制限が課せられていた[5]。

(3)　キンドレッドの長（ウルモトゥア）の側からの土地使用権の要請があった場合も，首長は最終的にその要請を拒絶することはできなかった（首長の覚えがめでたいウルモトゥアは，申し出ることによって，より広い土地の使用権を得ることができたという伝承も残っている）。

(4)　首長による貢物や労働サービスの収取は，一見したところ，剰余労働の搾取のように見えるが，1年に2回開催されていた全島的な儀礼イナシにおいて，一定量の生産物の再分配が行われていた。

(5)　飢饉のときには，大首長の貢物収取の権限も大きく制約されたので，大首長に依存して生きていた首長の従者（小首長やマタプレ）の中には，様々な仕方で生産物を蓄えていたトゥアよりも厳しい生存競争を強いられる者が少なくなかった（Mariner［1827, vol.1: 227］）。

(6)　トンガの政治制度は，親族集団の内部に基盤を見出したものであり，島嶼間に政治関係が形成されるのも親族集団に関してであり，さらに政治戦略が構想されるのも親族集団との関連においてであった（バランディエ［1971: 180］）。

このように見るならば，親族原理との絶縁が不充分なプレ・コンタクト時代の身分構造は，まだ階級関係ではなく，潜在的な階級の状態に留まっていた。トゥイ・トンガ（「神聖王」）を中心とする政治統合形態も，同じく親族原理との絶縁が充分ではなかった。このような意味で，プレ・コンタクト期のトンガの生産様式は，共同的生産様式を超えるものではなく，政治統合形態も原初国家の枠内に留まっていたと結論づけることができよう。

第2節　内戦と共同的生産様式の崩壊

1．内戦の過程

政治統合解体の兆しは，1780年代の末に現れ始めていたが，1799年の有力

首長フィナウによるトゥイ・カノクポル（トゥクアホ）の暗殺事件を契機として，プレ・コンタクト期の政治統合形態の中心は失われ，以後政治的野心を抱く諸首長の乱立状態が現れる。当面，こういった諸首長の政治的野心は，伝統的な貢納システムの再編を通して自己の支配を拡大することに向けられていた（Gailey［1987: 178］）。最も野心的なフィナウは，1799年，トゥクアホ暗殺の復讐を唱えていたトンガタプ島ヒヒフォ地区の首長に大規模な攻撃を行った。この戦闘で重要な役割を果たした人物が，キリスト教宣教師から転落したヴェイソンである。彼は，フィナウに協力して，不可侵の聖域に逃れて難を逃れようとしたヒヒフォの戦士のなかに火を投げ込んでこれを全滅させるという作戦を展開した（Orange［1840: 175］）。しばらくして，今度は，ヒヒフォの首長が反撃に転じ，先のフィナウの攻撃に協力したトンガタプ島のハハケ地区の住民を壊滅させる程の大攻撃を加えた。ラトゥケフによると，この戦闘で殺害された人々の死体の山の頂上から，遥か遠くのエウア島が見えたと言われている（Latukefu［1974: 26］）。

このような状況のなかで，もっとも高い価値を有する西欧の物品は，銃や大砲などの武器であった。フィナウもビーチコーマーを通して，銃の威力を充分に知っていたので，パパランギの船を捕獲する計画を入念に練っていたのである。フィナウが捕獲したポルトオ・プリンス号から大量の武器弾薬が運び出された。マリナーは，これらの武器弾薬の使用法をフィナウおよび彼の配下の戦士に教えていった。また平時には，算数，地理，天体の動き，キリスト教などの基礎知識をフィナウに教えた。しかし，マリナーに最も期待されていたものは，実戦での活躍であったと思われる。1807年，フィナウはポルトオ・プリンス号から得た新兵器を携えてトンガタプを再び攻撃した。この戦闘に参加した経験に基づいて，マリナーは，「フィナウは，銃の恐るべき威力に驚嘆した。彼は，配下の戦士の勇猛さに，それから特にマリナーと彼の仲間達の大変な助力に謝意を表明した」と述べている（Mariner［1827, vol.1: 20］）。この出来事の結果は重大であった。それは，戦闘が槍と棍棒の段階から銃と大砲の時代に入ったことを意味しているからである。犠牲者の

数は飛躍的に増えた。そして,こういった血腥い戦闘が,以後半世紀にわたって，トンガの各地で繰り広げられたのである。

内戦に突入してから，西洋人（パパランギ）に纏わる出来事は，伝統的な文化カテゴリー間の関係（トゥイ・トンガとトゥイ・カノクポル,王と首長,王・首長と民衆，王・首長とマタプレ，称号と血等々）に深い亀裂を与えていった。しかし，タウファアハウ（ジョージ１世）は，トンガにおける歴史と構造の関係にそれ以前には見られなかった決定的な変化をもたらしたのである。

彼は，統一を達成するために，プレ・コンタクト期の共同的生産様式と身分構造を支えていたタプの観念の一部を廃棄することも辞さなかった。伝統的な象徴体系とその中心に位置してきたトゥイ・トンガの神聖性は，既に崩壊しつつあったが，多くの首長はそのようなタプの観念の廃棄をあからさまに表明することを差し控えていた。そうすることは，各首長の政治的支配の基盤である親族原理,とりわけ年長性原理の否定を意味したからである。トゥイ・カノクポルの称号の正当な継承者であると目されていたタウファアハウにとっても，200年以上にわたって続いてきたトゥイ・カノクポル王家（年少リネージ）とトゥイ・トンガ王家（年長リネージ）との婚姻連帯関係を否定することはかなり困難であったと思われる。それにもかかわらず，タウファアハウは，敢えて伝統的なタプを破り，トゥイ・トンガ王家との婚姻連帯関係を否定する覚悟を固めていた。このような決意のもとに，タウファアハウは，彼の姉妹，ハラエヴァル・マタアホが，後にトゥイ・トンガ（最後のトゥイ・トンガ）となったラウフィリトンガのもとにモヘオフォとして嫁ぐことに反対し，ハラエヴァル・マタアホを別の首長トゥイ・ハアテイホに嫁がせるべきであると提唱した（Latukefu［1974: 90］）。

トゥイ・トンガ王家が途絶する危険があることを察知したラウフィリトンガは，神なる王の属性を捨てて，銃と戦士を各地から集め，この戦いに備えていた。その結果，ハーパイでの一戦では，ラウフィリトンガがタウファアハウを敗走させて勝利を収めた。敗走したタウファアハウは，トンガタプ島までいって多くの首長を味方につけるとともに大量の銃を入手し，次の戦い

に備えた。1826年，タウファアハウとラウフィリトンガは，ハーパイで最後の決戦に臨んだが，今度はタウファアハウが勝利した。このラウフィリトンガの敗北によって，トゥイ・トンガ王朝の途絶は時間の問題となり，同時にタウファアハウによるトンガ全島統一の可能性は大いに高まった。丁度この時期に，ウェズリアン・メソディストは，トゥイ・トンガ王朝の将来に見切りをつけ，タウファアハウに期待を寄せた。タウファアハウは，ウェズリアン・メソディストの庇護者となり，名前をジョージ１世に改めて，1831年に改宗した。それ以後，庇護者としてウェズリアン・メソディストを〈統制〉しながら，彼らから統一に向けての有益な助言と物質的な富を引き出していった。この過程は，植民地主義の浸透を警戒するジョージ１世の主体的な国家形成の動きの始まりとして捉えることができるであろう。

ウェズリアン・メソディストの宣教師は，キリスト教徒であるタウファアハウと異教徒の諸首長との闘いを「聖戦」と位置づけていたので，自ら商人としてタウファアハウに大量の武器を供給した（Gailey［1987: 180］）。装備において優勢であったタウファアハウは各地で勝利を収め，1830年代末には，ヴァヴァウとハーパイをほぼ支配下に入れた。同時に，宣教師の助言を受け入れながら法典の編成に着手し，1939年にヴァヴァウ法典（Code of Vavau）と呼ばれる最初の成文法をヴァヴァウ島のネイアフで発布した（Latukefu［1974: 121］）。この法典で最も注目すべき点は，割礼・入墨の禁止，偶像崇拝儀礼の禁止，強い蒸留酒の飲酒・販売の禁止などの規定に違反した場合，現物ではなく，ドルの科料が科せられていることである。このことは，ジョージ１世が当時既に貨幣の意味を理解していた，あるいは理解しようとしていたことを示している。

しかし，タウファアハウによる統一はその後必ずしも順調に進捗したわけではない。1842年に，カトリック教会は主イエス・キリストが掟を与え給われた唯一つの教会であり，トンガの人々は未だ真の宗教を知らないという主張を掲げて（Latukefu［1974: 136］），カトリック伝道所がトンガに開設された。カトリックの宣教師は，ウェズリアン・メソディストに対抗して，ラウフィ

リトンガ（トゥイ・トンガ）およびジョージ１世（タウファアハウ）に反感を抱くトンガタプ島のマアフやラヴァカなどの首長と結びついた。1845年に，支配の正当化のために伝統文化の一部を継承する必要性を認識したジョージ１世は，トゥイ・カノクポルとして即位し，1850年にはヴァヴァウ法典を発展させた法典（The 1850 Code of Laws）を発布し，自己の支配を固めようとしていた。

カトリックの宣教師はラウフィリトンガを担ぎ出してこれに対抗しようとした。自己の神聖性が伝統的な象徴体系と親族原理に由来するものであることを充分に認識していたラウフィリトンガは，当初カトリックとプロテスタントの双方を頑なに拒んでいたが，トゥイ・トンガの系譜を引く貴族カラニヴァル氏とのインタビューによると，1847年に遂にカトリックに改宗した。マアフやラヴァカは，「異教」と古い「慣習」に拘って改宗しなかったが，カトリック宣教師の積極的な援助を受けた。このようにして，内乱は，キリスト教徒対異教徒の戦いからプロテスタント対カトリックの戦いへ変化していった。カトリック陣営の様々な工作にもかかわらず，事態は相変わらずジョージ１世に有利な方向に推移した。追いつめられたカトリック陣営は，フランス海軍の介入に希望を託してトンガタプ島のペアという村に要塞を築いて立て篭ったという（Latukefu［1974: 136］）。しかし，ペアの要塞はジョージ１世の軍勢に包囲され，激しい攻防の末，1952年８月に遂に陥落した。頼みにしていたフランス海軍の到着は，同年12月であった。このようにして半世紀以上にわたる内乱が終息し，ジョージ１世はトンガの実質的な支配者となった。

２．共同的生産様式の崩壊

以上に述べたような内戦の過程を，単なるトゥイ・トンガ（ラウフィリトンガ）とトゥイ・カノクポル（ジョージ１世）の，あるいはカトリック宣教師とプロテスタント宣教師の政治的な覇権争いとして見るだけでは不充分で

ある。というのは，内戦の過程の中でプレ・コンタクト期のトンガの社会構成体を支えていた共同的生産様式が，壊滅的な打撃を受け，崩壊していったからである。この共同的生産様式の崩壊を促進した要因は多種多様であるが，主要な要因として次の五つを挙げることができるであろう。

① イナシ儀礼とタプの廃棄

先述したようにプレ・コンタクト期の貢物制度の中心に位置していたのは，トゥイ・トンガが主催して年2回行われていたイナシ儀礼（再分配儀礼）であった。1820年代に，イナシ儀礼は，キリスト教宣教師によって目撃されているが，1830年代になるとほとんど目撃報告がなくなるので，おそらくこの時期にイナシ儀礼は行われなくなったと見ることができよう。イナシ儀礼の廃棄は，トゥイ・トンガの存在価値の否定を意味するだけではなく，明らかに貢物制度全体の崩壊の危機を意味していた。また，ジョージ1世はプレ・コンタクト期の身分構造と密接に結びついていたタプの観念を積極的に廃棄していった。こういったタプの廃棄も，古い身分構造と貢物制度の存続を危うくするものであった。

② ヴァヴァウ・コード

タウファアハウ（後のジョージ1世）が，1839年11月20日，ヴァヴァウ島ネイアフにおける政治集会（フォノ）において，トンガ最初の成文法を諸首長に提示した。この成文法は，その後ヴァヴァウ・コードと呼ばれるようになった。同法典の最も大きな特徴は，プレ・コンタクト期の首長が有していた権限の縮小であり，この点について同法典は次のように述べている（Latukefu［1974: 223］）。

〈ヴァヴァウ・コード第4条〉

> 余は思う，人民は互いに争うことなく，陰口をきくことなく，戦を望むことなく，誠実に平和の神に仕え，多大の安らぎをもって暮らすべきなりと。それ故に，余は，汝らが汝らの民に自分自身のために働く時間を与えることを望む。彼らは，カヌーでの仕事，ヤムイモやバナナの植え付け，その他汝らが望むサービスであれば何であっても，汝らの要求

に応じて汝ら（首長）のために働く。然るに，余は汝らに告ぐ。汝らがフヌキすること，汝らの用のために彼らのバナナに標付を行うこと，あるいは彼らの物品を彼らから強制的に奪うことはもはや違法なりと。彼らの物品は彼らの自由に任せられるべきなり。

この条項は，公的には神の前の平等を説き，民衆を首長の圧政から解放することを唱えたキリスト教宣教師の意見を反映したものであると解釈されている。しかし，当時のキリスト教宣教師の頭の中には18世紀イギリスの社会・政治秩序のモデル（landlordism）があり，このモデルにそってジョージ１世への助言が行われたと考えることができよう。ところが，このモデルは，明確な階級関係，すなわち地代や農業労働の剰余価値を搾り取る領主と政治・経済的に大地主に従属する直接生産者との関係を内包していた。このように見るならば，ヴァヴァウ・コードは，親族原理に基づく身分構造から貢納制的階級関係への移行を最初に表明した法典であったと考えることができよう。

③　キリスト教宣教師の商業活動

1797年にトンガにやってきたLMSの宣教師は，二つの主要な目的をもっていた。第一に，「野蛮」なトンガ人に福音を伝え，彼らを改宗させること，第二に，プロテスタントの職業倫理に基づいて，怠惰なトンガ人に産業をもたらし，彼らを勤勉な労働に就かせることである（Wilson［1968: 279-281］）。しかし。多くの困難に直面して，結局，第一の目的よりも第二の目的を重視せざるをえなくなり，諸首長との経済的取引に傾斜していった。食糧の入手と引き換えに換金作物，布，鉄器などの「商品」を首長に与えたのである。既に18世紀末に，トンガの首長は，フィジーの白檀を入手することに夢中になっており，西欧の物品，とりわけ斧，鑿，釘に伝統的な交易品であった鯨の歯を携えてフィジーに行き，それらを白檀と交換していた（Gailey［1987: 219］）。こういった状況のなかで，最も有用であったものは，聖書ではなく，鉄器をはじめとする西欧の「商品」であった。というわけで，西欧の物品の供給源としての宣教師は，トンガの首長にとっても理解しやすい存在であったと思われる。この点は，布教の初期にトゥイ・ハータカラウアの系譜に属

するムリキハーメアが発した次の言葉にはっきりと現れている（Latukefu［1974: 26］）。

> 彼ら（宣教師）は，莫大な富をもたらしてくれた。彼らはそれを我々に進んで与えてくれた。我々はトンガにおける彼らの滞在から豊かな果実を収穫する。彼らの物品は，我々にとって大変有益なのだ。しかも彼らは行儀よくしている。

内戦が激しさを増すにつれて，西洋からもたらされた商品，とりわけ武器の需要が高まり，宣教師の商業活動はより一層重要なものとなった。このような過程の中で，西洋の「商品」と交換する食料を入手するために，首長層の中に，旧来の親族集団（カインガ）の枠を超え，他の村からの逃亡者を広く受け入れて，生産労働を組織する者が現れるようになった[(6)]。こういった新しい生産労働の様式の出現は，親族原理に基づく首長層と民衆層の関係に漸進的な変化をもたらしたと考えられる。

④　1850年コード

ジョージ１世は，1850年に新国家建設の基礎となる法典（1850年コード）を公布した。本法典の特徴は，以下の条項に窺われるように，旧来の貢物に代わる新たな義務として納税義務が婉曲に示されたこと，外国人への土地売却が厳禁されたこと，首長の支配は法に基づくものでなければならないこと，民衆もまた法を遵守する義務を有すること，民衆から首長への貢物（漁獲物など）に新たな制限が設けられたこと，などである（Latukefu［1974: 226-237］）。

〈税に関する法〉

> 王が妥当なりと考える義務は，全て王のために人民によって果たされねばならない。

〈土地に関する法〉

> トンガ，ハーパイ，ヴァヴァウの首長および人民が，異人（すなわち外国人）に土地の一部を売却することは違法なり。それは禁止される。本条項を侵犯した者は誰でも厳罰に処せられる。

〈首長に関する法〉

民衆が本法を遵守するか否かにかかわらず，本法を民衆に知らしめることがその責務である。もし彼らが本法を遵守しないときには，遵守するよう訓戒すべきである。彼らがなお本法を侵犯するときには，その不服従を公表せよ。

〈漁業に関する法〉

亀，ビンナガ，カツオ，ウルアなど大型魚を捕獲せし者は，誰でも，それで自らを満たすべからず。最初の捕獲物は首長に貢納し，2番目は当人の物とし，以下同じである。

法の遵守を求める条項が設けられてはいるが，1850年の段階で，このような条項が実効性を持つことはなかったと思われる。しかし，古い共同的生産様式や身分構造と両立しない，法・税金・貢物をめぐる新理念が打ち出されたことは，当時のトンガの首長および民衆の双方にとって大きな意味を有するものであったと言えよう。

⑤「異教」と古い「慣習」に拘るマアフ・ラヴァカの軍事的敗北

プロテスタント宣教師が支援するジョージ1世とカトリック宣教師が支援するマアフおよびラヴァカとの戦いは，新たな貢納的生産様式を推進しようとする政治集団と旧来の共同的生産様式を守護しようとする政治集団の闘争として解釈することができる。このような戦いにおいて，マアフ・ラヴァカが軍事的に敗北したことは，貢納的生産様式に基づく「立憲君主国家」の建設を妨害する実質的な政治勢力が存在しなくなったことを意味するものであったと言えよう。

第３節　階級関係の確立

１．貢納的生産様式と階級関係の確立：領主（貴族）と民衆

19世紀の前半に古い共同的生産様式は崩壊に向かっていったが，19世紀中葉の時点では，まだ新しい貢納的生産様式は完全に確立していなかった。貢納的生産様式の確立には，さらに半世紀の年月が必要であったが，この過程において決定的に重要な役割を果たしたものが，1862年以降の一連の土地法整備であった。

1862年法典の起草は，1860年にウェズリアン・メソディストの宣教師の一人としてトンガに到着し，まもなくジョージ１世の信任を得たS・ベーカーによって行われたものである。彼は，２年足らずの間にこの仕事を完成させた。そして1862年に，伝統的な首長の特権を制限し，トゥア（民衆）の解放（emancipation）を定めた条項を含む画期的な新法典（The 1862 Code of Laws）が発布された。

この法典は1875年憲法の直接的な基礎となっており，その大きな特徴は，以下の〈貢納に関する法〉に窺われるように（Latukefu［1974: 247］），民衆の古い身分構造と共同的生産様式からの解放を宣言する条項，いわゆる「解放令」（34条，1862年６月４日議会を通過）を含んでいること，貢税の額が具体的に明示されたこと，新たに地代の概念とその金額が示されたことである。

〈貢納に関する法（The Law concerning Tribute）〉

第１項　これまでトンガの法典に記されてきた農奴制（serfdom）に関する一切の条項は，無効となる。以下の条項が，トンガの王および首長によって制定されたトンガ法となる。

第２項　全ての首長および人民は，本法の制定以後，如何なる点から見ても，農奴制（serfdom）およびあらゆる隷属（vassalage）から解放されねばならない。首長あるいは人民は誰でも，強制的に，あるいはトン

ガ式の高圧的な要請によって，他者から物を奪い取ること，あるいは獲得することは違法である。

第３項　誰もみな，自己が有するあらゆるものに関して完全な統制権をもつ。

第４項　全ての首長および人民は，政府に貢税（tribute）あるいは税金（tax）を納めねばならない。王は，政府が雇用する長官，統治者，判事，官吏，（警察）その他全てにサラリーを支給せねばならない。最初の１年間の貢税は，１人につき３ドルである。

第５項　人民によって彼らの合法的な首長に支払われるべき地代（rent）は，１人につき年２シリングである。

以上のような重要な条項は，1875年のトンガ憲法に受け継がれていったが，このトンガ憲法には，貢納的生産様式の確立を考えるうえで決定的なメルクマールとなる新たな条項が含まれている。それは，領主としての貴族（noble）に関する次のような規定である（Latukefu［1975, Appendix A: 14］）。

〈第63条第２項〉

本憲法可決の後，国王は国会議員となる20名の貴族（noble）を任命する。このような首長はトンガの貴族となり，彼らの相続人も第48条にしたがって永久に貴族である。彼らは以下のように任命される。トンガタブ９名，ハーパイ５名，ヴァヴァウ４名，ニウアトプタプ１名。

この条項に加えて，貴族は世襲領地（トフィア）を与えられる旨を規定した次の条項も，生産様式の転換を考えるうえで，きわめて重要である。

〈第124条〉

憲法施行後に，国王はこれらの首長――第63条によって議会に参加する貴族と世襲のタイトルと領地を有するが議会には参加しない首長――を任命し，その名を公報およびププイに記す。

そのタイトルは，彼らの領地とともに父から息子へと世襲される。

この条項では，貴族に選任されない首長のなかにも世襲のタイトルと領地をもつことができる者がいる旨が記されているが，大切な点は，議会に参加

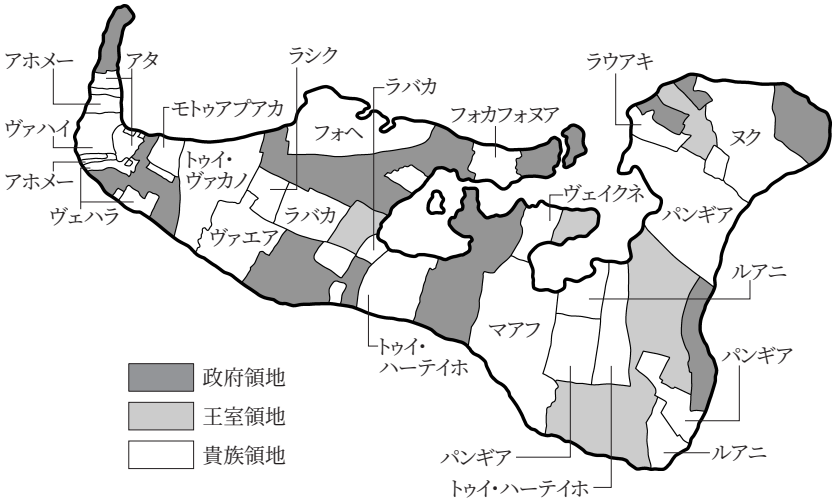
する貴族の全てが世襲領地を与えられる旨が明記されていることである。こういった貴族の実際の選任に際して，ジョージ１世は，内戦において協力的であった首長を貴族に任命し，敵対的であった首長（親族原理に基づく古い首長―民衆関係に執着した首長）の多くを，貴族の身分から排除した。このような身分制の再編成は，権力の集中化と階級関係の確立に関して，きわめて重要な帰結を持っていた。というのは，世襲領地という生産手段と支配的な政治的地位（国会議員としての地位）の双方を所有する貴族の創出は，必然的に貴族の対極に位置するトゥアが，単なる民衆ではなく，新たに「平民」として規定されることを含意していたからである。1880年には，トンガ憲法の修正条項が公布され，このなかで次のような平民の租税地（ヤムイモやタロイモなどを生産する，アピ・ウタと呼ばれる内地の耕地）と村落内居住地（アピ・コロ）についての規定が新たに設けられた（Latukefu［1975: 57］）。

> 全ての租税地は，承継される。租税地を有する者は誰でも，その租税地のために，それらを有する首長ないしは国王に，地代として１年に２シリングの額を支払わなければならない。全ての納税者は，内地の租税地とともに，村落内居住地を与えられ，それらは共に政府によって保護される。

以上の条項は平民の土地用益権が，共同的生産様式が支配的であったプレ・コンタクト期に見られたような首長の恣意に基づくものではなく，法によって保障され，親から子に相続されうることを規定したという点で，大きな歴史的意義をもっていた。しかし，平民の剰余労働が地代という形で貴族によって収取されることを定め，結果的に貴族の世襲領地の経営を安定化させたという意味で，それは階級関係の強化につながるものであった。

実際に，貴族に対する世襲領地の交付が行われたのは，1888年であり，貴族は世襲領地の耕作者から８エーカーにつき１年１シリングの地代を収取することになった。平民は貴族の土地をアピ・ウタとして21年，50年もしくは99年の期限つきで借りて（地代を払って）耕作することが可能であるとする条項（第128条）も設けられた。土地の売却は引き続き違法であったが，ト

図１　トンガタプ島貴族世襲領地分割図



（出所）　Gifford［1929: 173］から引用。

ンガ人の間でのリースや再リースの詳しい規定が設けられ，一定の制限（タウン・サイト８エーカー，内陸部1000エーカー以内）を設けて「白人」への土地のリースを認める条項も設けられた。この規定により，「白人」の合法的な商業活動やプランテーション経営にも道が開かれることになった。その後，土地関係の法的規定は頻繁に改定されていったが，1890年代初頭のトムソンの改革によって，世襲領地の地代を一括して政府が集め，それを貴族に支払う方式が採られるようになり，権力の国家への集中化と貢納的生産様式が確立した。それは同時に，王・貴族と平民の関係が，階級関係，すなわち生産手段としての世襲領地と政治権力の双方を所有する王・貴族と王・貴族に剰余労働を提供する平民との関係として確立したことを意味していた。その後，貢納的生産様式と結びついた世襲領地の分割が進み，1919年頃には，王の直轄地（Crown Land），39人の貴族および少数のマタプレが所有する貴族所有地（Noble Estate），および政府によって管理される政府所有地（Government Estates）の区分とその分布（図１参照）がほぼ確定したようである（Gifford

[1929])。このような世襲領地の所有形態は，先述した階級関係と結びついて，今なおトンガの生産関係の基本となっている。

2．貢納的生産様式と資本主義の節合：貴族（首長）による媒介

前項で述べた階級関係と貢納的生産様式の形成と並行して，19世紀後半には，植民地主義とグローバルな資本主義が徐々にトンガに浸透していった。本項では，この過程に焦点を合わせて叙述を行うことにしたい。

1820年代には既に，タヒチで生産されたポークをシドニーに輸送するオーストラリアの商船が水や食糧の補給のためにトンガタプ島に寄港していた。しかし，トンガタプ島は南太平洋の定期交易ルートから外れていたので，これらの商船の寄港は不定期で，しかも極めて稀であった。商船が定期的にトンガタプ島を訪れるようになったのは，ヌクアロファがトンガ王国の首都となった1860年代初頭以降である。1860年代には，「2～3年で財をなすことのできる」島という投書が新聞にも載るようになり（*New Zealand Advertiser*, 19 June 1865），少なからぬ数の貿易商人がオーストラリア，ニュージーランド，ヨーロッパからやって来て，ヌクアロファの波止場の近くに定住するようになった。1866年には，54人の商人がヌクアロファに定住し，7000トンのココナッツ・オイル（1万5000ポンド相当）を輸出するまでになったという（Campbell［1992: 103］）。ヌクアロファに定住する商人の数が増えるにつれて，彼らは，「半文明的（semi-civilised）なトンガ政府」を横柄に見下すようになり，生意気なトンガ政府の権限を制限していただきたいという旨の陳情書をニュー・サウス・ウェールズ総督宛に送付するまでになった（Rutherford［1971: 50］）。

また当時のトンガの代表的な貿易商人（コプラ・トレイダー）であったフィリップ・ペインのように，ヌクアロファの裁判所の判決を公然と無視する者もいた。1869年には，ハンブルクに本拠地を置くドイツの大企業，ゴドフロイ・ウント・ゾーンがウェズリアン宣教師と手を結んで，トンガの輸出入を

支配するようになった。ゴドフロイは，それまでのトンガの輸出品であったココナッツ・オイルではなく，コプラを買い上げてドイツ本国でオイルを抽出する企業戦略を取っていたので，ゴドフロイの進出後，トンガの輸出品は急速にコプラへ傾斜していった。しかし，ゴドフロイ・ウント・ゾーンは，1878年にトンガにおける利権を，同じドイツの大きな貿易会社であったD.H.P.G.（Deutsche Handels-und Plantagen-Gesellshaft）に譲り渡して，トンガから撤退した。D.H.P.G.の進出後，綿花，コーヒー，果樹などの換金作物やウールの生産など，農業の多様化が奨励されたが，何れも安定した産業に成長するまでには至らなかった。国内市場も，1887年のS・ベーカー暗殺未遂事件に続いてジョージ2世時代（ジョージ1世の没後，1893年に即位し，1918年まで在位した）の種々の政治不穏（国家財政の危機，汚職・不正の蔓延，ジョージ2世と諸首長との軋轢，英国の内政干渉）もあって，20世紀初頭に至るまで大きく拡大することはなかったが，19世紀末までには村落部においても教会への献金，罰金，地代，学費などの特定目的の支払いは貨幣で行われるようになっていた。首長層では，集めた地代の投資が海外市場の変動の影響を被り，民衆の生活は，大多数の農民がD.H.P.G.の奨励する換金作物（特にコプラとバナナ）を生産していたので，国際市場におけるこれらの換金作物の価格変動に大きく左右されるようになった。このようにして，トンガは，他のオセアニア島嶼社会と同様に，19世紀末までに世界資本主義経済の周縁に組み込まれていき，この過程で，貢納的生産様式と資本主義的生産様式の節合が徐々に進展していった。

貢納的生産様式と資本主義的生産様式の節合に関して，特記すべき点は，19世紀末以降に，領主（貴族）が積極的に外国資本の導入を進め，結果的にローカルな貢納的生産様式とグローバルな資本主義的生産様式を媒介する役割を果たしていったことである。その端緒は，19世紀末の国家財政の急速な悪化であった。1893年，ジョージ1世の死後，その王位は直ちにジョージ1世の曾孫ジョージ2世によって継承された。しかし，ジョージ2世即位の直後から，ジョージ2世の奢侈生活がもたらした負債の国費による補塡，服地，肉

類，材木，小麦粉，機械，灯油などの輸入品の急増，疫病（はしか）の防疫対策費の急増などのために，国家財政は崩壊の危機に直面した。時の総理大臣であり，後に貴族となったサテキ（Steki）と大蔵大臣は，財政の破産状態を立て直すために，1897年から1898年にかけて，トンガの貿易をほぼ独占していたドイツ企業D.H.P.G.から多額の融資を取り付けた（Campbell［1992: 110］）。

この政府とD.H.P.G.との癒着は，さらに一部の有力貴族とD.H.P.G.との癒着に結びついていった。これらの有力貴族は，コプラ，バナナ，コーヒーなど輸出用換金作物をD.H.P.G.に売り渡すことを意図して，自己の世襲領地内に商業プランテーションを新たに開設し，自ら「資本家」として配下の平民を適宜動員したり，あるいは他の首長に「労働者」の斡旋を依頼したりしながら，これらの人々を自己のプランテーションでの賃労働に従事させるようになった。このような賃労働の形態は，貴族が結びつく企業が，ニュージーランド系のハッター・ブラザーズ（19世紀と20世紀の転換期）[7]，オーストラリア系のバーンズ・フィリプ（1910年代以降現在まで），フィジー系のモリス・ヘドストローム（1910年代以降現在まで），日系のバンノ・ブラザーズ（主に1930年代）と変化していくなかで，少しずつ広がっていき，トンガにカボチャ・ブームを巻き起こした日系商社が時めく現在ではさらに一般化している。

換金作物の栽培を行う同種の賃労働は，ヨーロッパ人入植者に対する積極的な土地リース政策が打ち出された1910年代に，ヨーロッパ人が経営するプランテーションでも見受けられるようになった。しかし，宗主国のイギリス自体がトンガをあまり利益の上がらない島とみなし，植民地経営に消極的であったこと[8]，ヨーロッパ人への土地売却が厳禁され，しかも面積の狭いトンガでは，綿花やサトウキビなど利益の上がる作物の栽培に必要な大規模な農地を確保することが困難であったこと[9]などの理由で，トンガにおけるヨーロッパ人のプランテーション経営が大きく拡大することはなかった。この点，メラネシアの島々から年季契約あるいはブラックバーディング（奴隷

狩り）によって労働者が集められたフィジーやサモアなどの大規模プランテーションとは事情が異なっている。それでも，1930年には，トンガのコプラ生産量の2.5%が，ヨーロッパ人が経営するプランテーションで生み出されるようになり（Campbell［1992: 143］），民衆にとって賃労働の機会は着実に増大していった。

その後第二次世界大戦中に，トンガにおける賃労働の機会は急速に増大した。なぜならば，第二次世界大戦中，アメリカ軍がトンガに駐屯し，多数のトンガの人々が基地労働者として雇用されたからである。第二次世界大戦終了後，一時的に雇用の機会は減少した。しかし，1950年代に入ると，首都ヌクアロファにゲストハウス，小売り店，酒場，レストランが新たに開設され，港湾整備，道路建設，採石事業などの公共事業も開始されるようになったので，雇用機会は再び増加に転じていった。1960年代以降，トンガ政府の近代化政策（特に軽工業の振興と観光開発）の推進によって，トンガにおける賃労働はさらに広がりを見せるようになったが，特に1980年は，トンガの「資本主義経済発展にとって記念すべき年」であった[10]。というのは，同年ヌクアロファ東部のマウファンガ地区に小工業団地が開設され，ビール製造工場，塗料製造工場，小造船所，縫製工場，肥料製造工場などが次々と稼働し始めたからである。この小工業団地の企業を含めて，1980年に新たに登録した企業の数は，13に上る。しかし，これらの工場が稼働にこぎつけるまでの道のりは決して平坦ではなく，「有力な貴族の口利きがなければ，おそらく今日の成功はなかったであろう」という話を，筆者は1991年に同工業団地の複数の外国人経営者から聞いたことがある。ここにもまた，グローバルな資本主義経済のローカル・システムへの侵入における貴族（首長）の媒介的役割を見出すことができるであろう。

以上に述べたように，資本主義的な生産様式とそれに基づく貨幣経済は，19世紀末から現在に至るまでの約1世紀の間に，トンガに着実に浸透していった。そして現在（2001年），トンガ政府統計局担当官の推計によれば，トンガ国内で何らかの労働を通して安定的に収入（農業所得，労賃，給料）

を得ている人の割合は，全人口（約９万8000人）の約14.5％に達しているという。しかし，このような進展は，貢納的生産様式が衰退していった過程ではなく，貢納的生産様式と資本主義的生産様式が，トンガに特有の貴族の媒介的役割を通して，節合していった過程として捉えることができる。次項では視点を転じて，こういった生産様式の節合を，トンガタプ島K村における労働生活の現実の側から見ていくことにしたい。

３．ペザントの労働生活

K村は，首都ヌクアロファの北東28キロメートルの地点に位置している。村落の北側の海岸は，標高５～６メートルの崖になっており，その先は海岸線にそってリーフが広がっている。リーフの外側は急に深くなり，急潮が西から東へむかって流れている。集落は東西方向に延びる道路にそって展開しており，同村の首長Nの住居や主な公共施設もこの道路に面している。集落の南側には，豊かな農耕地が開けている。K村の人口は，1976年現在で，男786名，女760名，計1546名で，15歳以下の人口が全体の約51％を占めている。トンガタブ島には，行政単位としての村落は全部で62あるが，K村の人口は，これら62の村落の中でも上から９番目にあたり，トンガの全ての村落を通してみても，かなり大きな部類に属する。他の同じ規模の村落と比較して，公共施設の数も多く，現在，初等教育機関1，病院１，教会７，ポリス・ステーション１，集会所１がある。

K村の長老L氏によると，L氏が20歳の頃，すなわち1910年代の末には既に，マッチ，灯油，衣服，鉛筆などの生活必需品の購入，あるいは地代，学費，教会への献金の支払いために現金は不可欠であった。しかし，食料，農具，漁具などは，ほとんど「自給」し，現金を使う機会は非常に限られていたので，現金が必要になったときにヌクアロファの貿易商人のオフィスにコプラをもっていけばよかったという。そのような生活が長く続いたが，今の国王が即位した頃（1966年），村人がお金に非常に貪欲になり，豚，鶏，タロイモ，

ヤムイモ，キャッサバ，乾燥させたカバの根，魚等々，あらゆるモノに値段がつけられるようになったので，村での生活がぎすぎすしたものになってしまったという。1960年代後半に，ニュージーランドやオーストリアなど賃金の高い国への出稼ぎブームが始まるので，ちょうどこの頃から，村落生活が貨幣経済の直接的影響を強く被るようになっていったと考えることができよう。

1960年代後半以降，村落内の経済活動は大きく変化していった。第一に，手っ取り早く現金を得るために，ファレ・コロア（fale koloa）と呼ばれる小さな雑貨屋を開業するものが多くなった。筆者のインフォーマントであるS氏（51歳）の父もその一人であった。S氏の父は，1970年にヌクアロファの金融業者から1000パアンガ（約12万円）の融資を受け，コーンビーフ，トイレット・ペーパー，文具，タバコ，パン，マッチ，蚊取り線香，食器など売れそうな商品を問屋から仕入れて，K村にファレ・コロアを開いた。開店と同時にたくさんの村人が店にやってきたが，現金で支払いを済ませるお客は１人か２人で，ほとんどのお客は「掛売り」で商品を持って帰ってしまったという。S氏によれば，村ではまだカインガ（親族）の絆が生き残っており，この絆に縛られている村人の多くは，タパ布やパンダヌス製の籠のような村のあちこちにある通常のコロア（財）と商店の中にある商品を十分に区別できないのだという。S氏の父の店は，数日間で商品がなくなり，次の商品を仕入れるお金もなかったので，結局１カ月後に店を閉めたという。このように，親族の絆を断ち切ることができなかったS氏の父は挫折してしまった。しかし少数ではあるが，ファレ・コロアの経営で成功を収めた人もいる。これらの経営者は，村人から「親族の結びつきを情け容赦なく断ち切り，客との関係をよそよそしいものにすることで，村の生活の変化（貨幣経済の浸透）を助長した人物である」とみなされている。

第二に注目すべき点は，1960年代後半以降，村での生産活動の性格それ自体が大きく変化し，村人の「ペザント化」が顕著になっていったという事実である。生産活動の基礎は，今日でもアピ・ウタあるいはアピ・トゥクハウ

と呼ばれる割り当て農地での農業である。農業生産の基礎となるアピ・トゥクハウの用益権を有している世帯の数は，1982年 4 月現在，全世帯数の約61％であり，このなかには，一つの世帯に 2 人以上の保有者がいる世帯17が含まれている。これらの世帯の約20％が，以前とは異なり，自給用作物の栽培と換金作物栽培をはっきりと区別しており，S氏の場合，前者のための労働時間と後者のための労働時間の割合が，ほぼ 7 対 3 になっている。S氏は，このような生産労働の変化を「負担の大幅な増加」として意識しており，会うたびに「できることならば昔の気楽な生活に戻りたいよ」という言葉を口にしていた。その他の多くの人々も，過去への郷愁をうかがわせる同じような発言を繰り返していたので，「ペザント化」の過程の中で既存の貢税に新たに付加された労働の負担は，K村の人々によってかなりの重荷として意識されていると言ってもよいであろう。

第三に，村人の「ペザント化」に伴って，より多くの現金を得るために，敢えて村外で厳しい労働に従事しようとする者が増えたという点を指摘することができる。例えば，1000人以上の観光客をのせた客船がヌクアロファに入港する日は，老若男女を問わず，多くの村人が朝から木彫りの人形，お土産用のバスケット，貝製のネックレス，バナナ・マンゴ・パイナップルなどの果物を携えて，ヌクアロファの港に押し寄せるようになった。同様の理由で，比較的若い成人男子がヌクアロファへ行き，道路工事，港の修復工事，港での荷役作業，政府庁舎の建設工事などで 1 日当たり約10バッアンガ（1997年現在で約950円）の日当を得るというパターンも一般化してきた。また1980年代に入ると，「日雇い労働」ではなく，常勤の被雇用者として会社に勤務する者も出てくるようになった。

第四に指摘すべき大きな変化は，海外における出稼ぎ労働の経験が，「労働者階級」意識の形成に結びついていく動きである。先述したS氏は，1980年から1982年にかけて，ヌクアロファの荷役関係の会社でパートタイムの労働に従事した経験を持っている。ところが，この会社の荷役労働はきわめて厳しく，それに加えて賃金未払い期間が数週間に及ぶことも珍しくはなかっ

た。そこで，S氏は，K村出身の他の仲間3名とともに，この会社の経営者に待遇の改善を要求した。しかし，この経営者は待遇改善要求を拒絶して，S氏とその仲間に解雇を告げた。これに対して，S氏のグループは，未払い賃金の支払いを求めて会社の事務所の前で座り込みを続けたが，結局，会社側によって物理的に排除されてしまった。S氏によると，この「労働争議」というべき事態を，当時のS氏は「村の対立」として捉えていたという。というのは，この会社の経営者とマネージャは，トンガタプ島のH村の出身であり，H村の住民とK村の住民の間では，昔からトラブルが多発していたからである。S氏が先の出来事を「労働争議」として捉え直すようになったのは，アメリカ合衆国カリフォルニア州で10年に亘って建設労働者として働いた経験を携えて，1996年にトンガに帰国した直後であった。このとき初めて，自給作物を栽培する自分と賃労働に携わる「もう一人の自分」を「労働者」という意識のなかに統合することができるようになったという。K村において，S氏のように長期の出稼ぎを経験した人は稀であるが，2年ないしは3年ごとに1年未満の短期の出稼ぎを繰り返す人はかなり多い。こういった定期的な出稼ぎを繰り返してきた人の多くも，海外での労働経験（とりわけ組合を見聞きした経験）を通して，今では自己を「労働者」として位置づけるようになっている。階級意識の形成には，現実的な基盤が関わっている。隣国のフィジーでは，20世紀の初めから，植民地体制のもとで製糖業や鉱業が発展していったので，第二次世界大戦以前においても，一定の階級意識を有する労働者によって戦闘的な争議（例えば，2300人の労働者が1942年にナンディの空港で2日間ストライキを行った事件）が繰り返されてきた。ところがトンガでは，1980年代に入っても，「ペザント」は，まだ必要に応じて不定期的に利用される予備労働力にすぎなかったので，階級意識が形成される現実的な基盤がほとんど存在しなかった。1990年代に入って，ニュージーランド，オーストラリア，アメリカ合衆国などにおけるトンガ人労働者の組織的な労働経験の蓄積が持ち帰られるようになり，トンガ国内の労働の現場においても，海外での労働経験の蓄積に基づく新たな解釈が進行していった。このように

して，階級意識を生み出す現実的な基盤が1990年代になってようやくトンガにおいても形成され始めたと言うことができよう。

最後に注目すべき点は，上述した出稼ぎ労働や海外に住む親族からの経済的援助（送金など）が，「ペザント」の二極分解を促進しているという事実である。過去10年間に，K村住民の出稼ぎや外国人との結婚が急速に増加していった。その結果，出稼ぎ者あるいは外国に定住している親族からの経済的援助の有無が，アピ・トゥクハウを所有している世帯の経済を二極に分解する傾向が顕著になり，海外からの経済的援助を何らかの形で受けている世帯は，新しいヨーロッパ型の住居を持ち，より豊かな物質生活を享受している。一方，アピ・トゥクハウを保有していない世帯の多くは，親族のアピ・トゥクハウやヌクアロファでの「日雇い労働」によって，なんとか日常生活を推持しているのであるが，このような世帯であっても，海外から経済的援助を受けることができる場合には，水準以上の経済生活を営んでいる。このような「ペザント」内の経済的格差は年々拡大しており，それに起因するK村の住民相互間の葛藤（羨望，嫉妬，恨み等々）は，現在，着実に増加している。

第４節　中間階級の形成：民衆教育エリートの台頭

前節で述べた「ペザント化」の進展は，トンガの階級関係の変化を考えるうえできわめて重要な社会過程であるが，「エリートへの道は，今や，高学歴という新しい基準を通してすべてのトンガの人々に対して開かれている」という教育省のスローガンのもとに進行してきた，「中間階級」としての民衆教育エリートの台頭も，それと同程度に重要な社会過程である。このような現象は，市場において取引される教育・技術上の資格の問題と密接に関係しているので，ギデンスが強調する「市場能力の重要性」という視角からアプローチすることができるであろう。

現在のトンガでは，教育的達成という新しい市場能力が，気楽さ（anga

faingofua）や権威への専敬（faka’ apa’ apa）といった伝統的な価値を超える重要性をもちつつある。その結果，高等教育機関の学位と威信に富む職業を有する教育エリートとそれらを欠く非教育エリートの区別が，王族，首長（貴族），マタプレ，民衆からなる既成の分類・格付けカテゴリーをクロスカットして，王族・首長教育エリート（hou ‘eiki ma ‘u mata’ itohi），王族・首長非教育エリート（hou ‘eiki hala he mata’ itohi），民衆教育エリート（me ‘avale ma ‘u mata’ itohi）などの新しい分類・格付けカテゴリーが現れて来た。これらの新しく出現した分類・格付けカテゴリーの中で，最も注目に値するものは民衆教育エリートであろう。民衆教育エリートのライフヒストリーを検討してみると，民衆教育エリートに次の四つの型が認められることが明らかとなる。

(1)　トンガ憲法成立以前に民衆であった人物の末裔で，広義の親族（kainga）に原民衆エリートに属する人物が１人以上含まれている型。かつてパプアニューギニアで精力的に布教活動を行っていた高名な聖職者を父に持つH氏（オーストラリア国立大学大学院の卒業生で，トンガ政府の役人を経て，現在南太平洋大学で教鞭をとっている）は，この型の典型である。この型の特徴は，原民衆エリートであった親族の「語り」が，目標達成の原動力となっていることである。

(2)　トンガ憲法成立時に首長またはマタプレから民衆に「格下げ」された人物の末裔で，同時に広義の親族（kainga）に原民衆エリートに属する人物が１人以上含まれている型。ニュージーランド・オークランド大学工学部の最初のトンガ人卒業生で，トンガ政府の役人であったK氏は，この型に属する民衆教育エリートとして知られていた。この型では，「元々は首長であった」という自負心と原民衆エリートであった親族成員への語りが，目標達成に向けて相乗効果を発揮している場合が多い。

(3)　トンガ憲法成立以前に民衆であった人物の末裔で，広義の親族（kainga）に原民衆エリートに属する人物が１人も含まれていない型。南太平洋大学大学院で教育学を専攻し，現在同校で教鞭をとっているT女史はこの型の代表である。この型では，しばしば，「優れた人物との偶

然の出会い」が当人の選択に影響を与えている。

(4) トンガ憲法成立時に首長またはマタプレから民衆に「格下げ」された人物の末裔で，広義の親族（kainga）に原民衆エリートに属する人物が１人も含まれていない型。南太平洋大学で経済学を専攻し，現在ヌクアロファで企業を経営しているA氏は，この型の民衆教育エリートの一人である。また，南太平洋大学で地理学を専攻し，トンガ・ハイスクールで教鞭をとった後，現在オークランド大学大学院で研究を継続しているK女史もこの型に属する。この型では，トンガ憲法成立以前には首長であった人物の「格下げ」に対する「怨念」が当人のキャリアー志向に強く作用している場合が多い。

以上の全ての型に共通する民衆教育エリートの特徴は，生産手段は所有していないが，教育上・技術上の資格を所有していることである。このような意味で，民衆教育エリートは，ペザントを核とする「労働者階級」と王・貴族・資本家を中心とする「上層階級」の双方から区別される集群（中間階級）として存在している。また，「意識」のレベルにおいても，民衆教育エリートは,「上層階級」との対抗関係において自己を弁別する独自のアイデンティティ（「今後，トンガを導いていくのは我々である，貴族などはもはや恐れるに足らない」といった自己の位置づけ）を有している。

以上のような民衆教育エリートのアイデンティティは，1980年代末以降の民主化運動（prodemocracy movement）の展開のなかではっきりと表明されてきた。トンガ政府のパスポート非合法販売問題に端を発するこの運動の中心的な担い手は，民衆議員アキリシ・ポヒヴァ（Akilisi Pohiva），カトリック教会司教パテリシオ・フィナウ（Patelisio Finau），カトリック教会司祭セルウィン・アカウオラ（Selwyn Akauola）などの民衆教育エリートのグループであった。この運動は，1990年代に入って国王・貴族を中心とする既成の社会政治秩序の刷新を求める大きな流れとなり，1992年11月24日から27日にかけて，トンガ憲法改正の可能性を議論するためにカトリック・バシリカ教会で開催された憲法集会で頂点に達した。ここで注目すべきことは，このトンガ史上

前例のない大規模な政治集会に，上述した民衆教育エリートのグループのみならず，著名な人類学者エペリ・ハウオファをはじめとして，海外に居住する多くのトンガ人民衆教育エリートが参加し，この運動に積極的に関わっていく旨を表明したことである。前節で述べた「ペザント化」された民衆の多くも，これらの著名なトンガ人民衆教育エリートの活躍に期待を寄せていた。ところが，1990年代の後半に入って，こういった一連の民主化運動の熱気が冷めていく過程の中で，「上層階級」に対する批判的言動を行ってきた民衆教育エリートのなかに，「ペザント」を見下すことによって自己のアイデンティティの維持を図ろうとする動きが窺われるようになった。このような状況の中で，民衆教育エリートに対する「ペザント」の不信感が高まり，その結果,「中間階級」としての民衆教育エリートと現実に目覚めて「労働者階級」意識を抱きつつある「ペザント」との落差は次第に拡大する傾向にある。しかし，より根本的な問題は，政党政治実現に向けての具体的なプランを持っている民衆教育エリートのみが，現状では，「上層階級」と「ペザント」の対立からなる基本的な階級関係とそれを機軸とする貢納的生産様式と資本主義的生産様式の節合を止揚できる潜在力を有しているということである。このように見るならば，今後のトンガの政治動向のなかで最も注目すべき事柄は，「中間階級」としての民衆教育エリートが実現を目指している政党政治のプランに，「ペザント」がどのような対応を示すかという点であろう。

〔注〕

(1)　現在知られている限りでは，トンガの人々が最初に接触したヨーロッパ人は，オランダ人探検者のル・メールとスハウテンである。彼らは1616年にトンガ諸島北部の住民と接触したが，その結果は暴力的な衝突を含む悲劇的なものであった。彼らは帰国後アムステルダムで航海の記録（1618年のスハウテンの記録および1622年のル・メールの記録）を出版した。これらの記録が，トンガに関する最初の文字史料である)。

(2)　18世紀末のトンガでは，トゥイ・トンガ，トゥイ・ハータカラウア，トゥイ・カノクポルの三つの王朝が併存していた。この三つの王朝のうち，トゥイ・ハータカラウアは，トゥイ・カノクポルの台頭によって既に著しく零落して

いたので，実際には，儀礼的最高首長トゥイ・トンガと世俗的最高首長トゥイ・カノクポルの並立からなる政治統合形態（いわゆる二重王権システム）が存立していたと見ることができるであろう。

(3) R・ファースやM・サーリンズのポリネシアの出自集団に関する研究以来，トンガのハアは，共通の始祖への系譜的な近接度に基づいて序列化された父系出自集団として捉えられることが多かった。確かに，多くの系譜伝承は称号の相続が父系のラインにそって行われたことを物語っているが，少数ではあるとはいえ，母方を通じて系を辿りうる様式が存在したことを示唆する伝承も語り継がれている。このような意味で，ハアはリジッドな父系出自集団ではなく，むしろ共系的性格を有する親族集団であったといえよう。

(4) イナシは，初物が生産される6月か7月に1回（inasi ‘ufimui），作物が成熟する10月か11月にもう1回（inasi ‘ufimotu’ a），合計2回行われていたと考えられる（Urbanowicz［1990: 82-83］）。この2種類のイナシを一括して捉えれば，貢物の時期は年2回になり，別々のものとして捉えるならば，その時期は3回になる。

(5) この点に関する次のようなホグビンの言葉は，的を射た指摘であるといえよう。この表面的には専制とみえる制度も，究極においては，相互の責任を根底としていたことが判る。平民が酋長や王の権威を承認せねばならぬとすれば，酋長や王もその代わりに，世論によりその権威が明確に限定され，一般に承認されたる行為の標準が遵守されることが期待されていた（ホグビン〈吉田一次訳〉『ポリネシアにおける法と秩序』三省堂，1942年）。

(6) ハハケ地区の首長Nから得た口頭伝承による。

(7) D.H.P.G.の融資によっても財政状態はあまり好転しなかったので，1898年，サテキはさらにニュージーランドのオークランドを拠点とする企業ハッター・ブラザーズ（the Hutter Brothers）との間に長期信用貸しの契約を結んだ。その後1904年まで，ハッター・ブラザーズはトンガ政治を牛耳った。

(8) 1899年，イギリス，ドイツ，アメリカの三国間の植民地分割を協議する会議が，サモアの首都アピアで開催され，ドイツの西サモア領有とアメリカ合衆国の東サモア領有を承認するサモア協定（Samoan Convention）が締結された。この協定を受けて1900年に，トンガ王国を保護領とし，外交権と予算編成権をイギリスが掌握するという趣旨の二国間条約の締結が，ジョージ2世の頑強な抵抗が続く中で強行され，トンガ王国は保護領（protectorate）という名のイギリス植民地となった。しかし，イギリスは重荷を背負いたくはなかったのでトンガを決して併合しようとはしなかった。

(9) トンガでは，1862年法典においても，1875年憲法においても，土地の売買が禁止されていたので，西洋人が土地を入手する場合，土地の使用権だけを期限付きのリースという形で買い取る他に道はなかった。そのために，19世

紀末から20世紀半ばにかけてのヌクアロファでは，西洋から来た商人の数が一定数に達した後は，ほとんど増えることはなかったのである。この点は，西洋人が土地を収奪してプランテーションを拓いていったサモアやフィジーには見られない，トンガに固有の現象であったと言えるであろう。

⑽　通商産業省のダイレクターとのインタビューによる。

〔参考文献〕

〈日本語文献〉

青柳まちこ［1991］『トンガの文化と社会』三一書房。

大谷裕文［1991］「トンガの王権儀礼」（松原正毅編『王権の位相』弘文堂）。

ギデンス，M.（市川統洋訳）［1977］『先進社会の階級構造』みすず書房。

サーリンズ，M.（山本真鳥訳）［1993］『歴史の島々』法政大学出版局。

バランディエ，G.（中原喜一郎訳）［1971］『政治人類学』合同出版。

フレーザー，G.（永橋卓介訳）［1972］『金枝篇』岩波書店。

ホグビン，I.（吉田一次訳）［1942］『ポリネシアに於ける法と秩序』三省堂。

〈外国語文献〉

Campbell, I. C.［1992］*Island Kingdom:Tonga Ancient & Modern*, Christchurch: Canterbury University Press.

Finney, B. R.［1965］“Polynesian Peasants and Proletarians: Socio-Economic Change among the Tahitians of French Polynesia,” *Journal of the Polynesian Society*, Vol.74, No.3.

Gailey, Christine Ward［1987］*Kinship to Kingship: Gender Hierarchy and State Formation in the Tongan Islands*, Austin: University of Texas Press.

Gifford, E. Winslow［1924］“Tongan Myths and Tales,” *Bishop Museum Bulletin*, Vol.8.

――［1929］“Tongan Society,” *Bishop Museum Bulletin*, Vol.61.

Goldman, I.［1955］“Status Rivalry and Cultural Evolution in Polynesia,” *American Anthropologist*, Vol.57.

Latukefu, Sione［1974］*Church and State in Tonga*, Canberra: Australian National University Press.

――［1975］*The Tongan Constitution*, Nuku‘alofa: Tonga Tradition Committee Publication.

Leckie, Jacqueline［1990］“Introduction,” Clive Moore, Jacqueline Leckie and Dung

Munro eds., *Labour in the South Pacific*, Townsvill: James Cook University of Northern Queensland.

Marcus, George E. [1980] *The Nobility and the Chiefly Tradition in Modern Tonga*, Wellington: Polynesian Society Inc.

Mariner, W. [1827] *An Account of the Natives of the Tongan Islands*, compiled by John Martin, Edinburgh: John Constable.

Mayer, Adrian [1973] *Peasants in the Pacific: A Study of Fiji Rural Society*, London: Routledge & Kegan Paul.

Orange, J. [1840] *Life of the Late George Vason*, London.

Rutherford, Noel [1971] *Shirley Baker and the King of Tonga*, Melbourne: Oxford University Press.

Sahlins, M. D. [1958] *Social Stratification in Polynesia*, Seattle: Washington University Press.

—— [1981] *Historical Metaphors and Mythical Realities*, Ann Arbor: The University of Michigan Press.

Tongan Government [1966] *Tonga Population Census*, Nuku'alofa: Statistics Department.

—— [1976] *Tonga Population Census*, Nuku'alofa: Statistics Department.

—— [1986] *Tonga Population Census*, Nuku'alofa: Statistics Department.

—— [1995] *Report of the Ministry of Education*, Nuku'alofa: Ministry of Education

—— [1996] *Tonga Population Census*, Nuku'alofa: Statistics Department.

Urbanowicz, Charies Francis [1990] *Tongan Culture: The Methodology of an Ethnographic Reconstruction*, Ann Arbor: UMI.

Williamson, Robert W. [1924] *The Social and Political Systems of Central Polynesia*, Cambridge: Cambridge University Press.

Wilson, James [1968] *A Missionary Voyage to the Southern Pacific Ocean, 1976-1798*, New York: Praeger.

Wood, A. H. [1972] *History and Geography of Tonga,* Wodonga, Victoria: Border Morning Mail.